

# 山と博物館

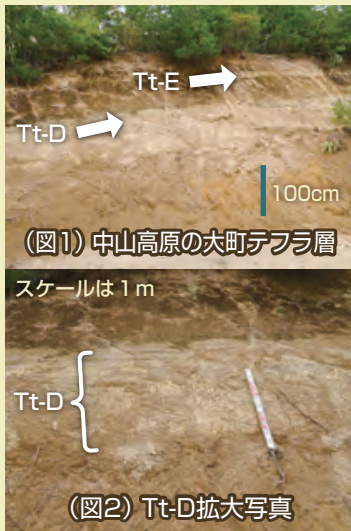
「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2024  
**冬号**  
第 69 巻 4 号

無料  
Free

表紙の 1 枚 ..... 1  
・大町テフラ  
さんばく研究最前線 ..... 2・3  
・ミヤマオダマキはマルハナバチ媒花植物なのか!?  
企画展特集 ..... 4・5  
・企画展「学校の生きもの探索記」見どころ紹介

展示・イベントのご案内／お知らせ ..... 6  
博物館のひろば ..... 7  
付属園だより／山博友の会だより ..... 8  
・ライチョウ放鳥のご報告／  
「播隆の道程」 「善光寺街道を歩いてみようⅢ」



(図1) 中山高原の大町テフラ層

スケールは 1 m

(図2) Tt-D拡大写真



(図3) 室堂～雷鳥荘周辺の立山火山噴出物

大町テフラ

竹村 健一

中山高原(旧大町スキー場)では黄褐色をした土の壁が見られる場所(露頭)があります。これは、「大町テフラ(火山灰)層」とよばれている約35万年前から約数千年前に降り積もった火山灰や風雨によって運ばれた粘土質な土壌です。少し色の異なる縞模様(縞模様)が火山灰層です。この中には20数万年前から活動を始めた立山火山の火山灰も挟まれています。そのうち、約10万年前に噴火した「立山Dテフラ(略称Tt-D)」と約7万年前の「立山Eテフラ(略称Tt-E)」は、群馬県や八ヶ岳周辺でも確認されています。この2つの火山灰は立山の室堂から五色ヶ原のあたりが噴出源と考えられています。

図1・2は、中山高原で見られる露頭の写真です。矢印で示した部分がTt-D(厚さ100cm)とTt-E(厚さ25cm)です。立山から約25km離れた大町にもかなりの量の火山灰をもたらしていたことがわかります。

図3は、立山室堂周辺の写真です。中央やや上付近に「赤

壁」とよばれる崖があります。赤褐色の地層が積み重なっています。軽石やスコリアなどを含むTt-E層と同時期に堆積した砂礫層の互層です(厚さ50m)。その右下に見える黒灰色の「黒壁」は、称名滝火砕流堆積物(厚さ20m)で有料道路が通る弥陀ヶ原や景勝地「称名滝」を形成しています。この堆積物はTt-Dに対比され、その分布範囲などから噴出源に近いと考えられています。ここでは弱く溶結しているのが観察されます。奥の建物が雷鳥荘で、その左側の白煙は、地獄谷からの火山性ガスの噴気です。登山道沿いでも強烈な硫黄臭がします。

立山は、有史以来の噴火記録はありませんが、地下ではマグマによる活動が継続していることがわかります。いずれ大町に再び火山灰が降る日が来るかもしれません。

文献：中野・奥野・菊川(2010)立山火山、

地質学雑誌, 116巻, 37-48.

(市立大町山岳博物館 専門員)

- ◆市立大町山岳博物館は付属園を含め、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。このほか、年末年始は休館となります。
- ◆開館時間は次の通りです。4～11月：午前9時～博物館：午後5時(入館は午後4時30分まで)・付属園：午後4時30分(入園は午後4時まで)、12～3月：午前10時～博物館・付属園：午後4時(入館は午後3時30分まで)。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー(長野県民割引)」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は1月18・19日、2月15・16日、3月15・16日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名/未就学児/大町市内小・中学校に通う児童・生徒/大町市在住の高校生/大町市在住の65歳以上の方》



博物館施設案内  
はこちら

# ミヤマオダマキは マルハナバチ媒花植物なのか!?

千葉 悟志(市立大町山岳博物館) 白井 伸和(白山高山植物園)

※マルハナバチの同定者: 須賀 丈さん(長野県環境保全研究所)

山岳博物館では、高山植物の生活史について、白山高山植物園(石川県白山市白峰)と協力しながら現在、研究を進めています。

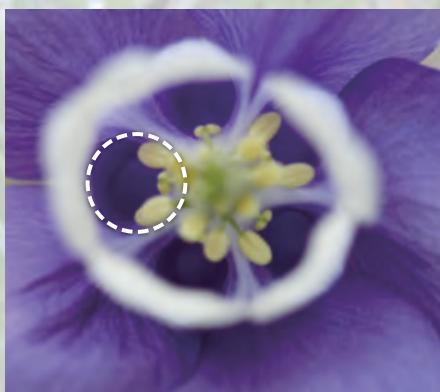
ここでは、ミヤマオダマキの生活史に関連した調査結果をもとに、どのようにして種子が結実しているのかについてお話ししたいと思います。

ミヤマオダマキは、海岸草地から高山風衝地<sup>ふうしょうち</sup>にまで幅広い環境に生育する多年草で、南千島・北海道・本州(中部地方以北)に分布し、サハリン・朝鮮半島北部にも分布しています。

北アルプスでの開花は、7月中旬から下旬にかけて見ごろとなりますが、博物館付属園(標高約776m)のような標高の低い場所では、4月下旬から5月上旬となります。



▲写真1 花の各部位の説明



▲写真2 5つの花冠(点線)の先には蜜源の距がある



▲写真3 訪花したオオマルハナバチ(有川 美保子さん撮影)

ミヤマオダマキの花は、写真1のようなとてもユニークなつくりをしています。花には蜜<sup>みつ</sup>があり、距<sup>きよ</sup>というところに隠されています。この蜜を吸うには、花奥に潜り込み、蜜の在処まで長い口<sup>こうぶん</sup>(口吻)を届かせる必要がありますが(写真2)、この条件に当てはまる昆虫と言えば、マルハナバチのなかまが想像されます。マルハナバチは、同じ種<sup>しゆ</sup>の花から花へつぎつぎと訪れるため、植物からすると、花粉の送受粉にとっても頼りになる昆虫です。

ミヤマオダマキの結実にもこのマルハナバチが関わっているだろうと、2018年~2020年に、大町山岳博物館友の会会員の協力を得ながら白馬岳で調査を行いました。

以前、山岳博物館では、コマクサの花を訪れる昆虫の調査を蓮華岳で行い、そのときは、オオマルハナバチやナガマルハナバチ、ニッポンヤドリマルハナバチが訪れ、特にオオマルハナバチが頻繁に花から花へと移動していました。

そのため、ミヤマオダマキの花にもマルハナバチが訪れ、容易に撮影ができるだろうと考えていたのですが、予想に反してマルハナバチは、なかなか花を訪れず、3年間の観察を経て、ようやくオオマルハナバチとトラマルハナバチの2種を確認しました(写真3と4)。



▲写真4 石の上で休憩中の  
トラマルハナバチ



▲写真5 盗蜜をするオオマル  
ハナバチ



▲写真6 距の近くにあけられ  
た穴



▲写真7 オオマルハナバチの  
口吻は比較的短い



▲写真8 結実した種子



▲写真9 結実しなかった種子

ただし、トラマルハナバチは1回の観察のみで、ほかの観察例はオオマルハナバチでした。オオマルハナバチの13の観察例のうち、花奥に潜り込んだのは4例で1花のみで飛び去るか、多くても2花あるいは3花を移動して、飛び去っていました。それよりも、多く観察された行動は、花冠近くに<sup>かかん</sup>あけられている穴から<sup>こうらん</sup>口吻を差し込む行動でした(写真5と6)。これは、<sup>とうみつ</sup>盗蜜という行動で、オオマルハナバチは、マルハナバチのなかでは、比較的、口吻が短く(写真7)、そのために盗蜜をされると考えられます。そして、一度、盗蜜を覚えるとおそらく、同じ種の花に訪れるたびに盗蜜をずっとし続けるものと思われる。

それでは、マルハナバチが花粉の送受粉を担わない場合、結実はするのでしょうか。

そこで、博物館で栽培するミヤマオダマキの花に、昆虫が訪れないように花に袋をかけたもの(A)、つぼみのうちに雄しべを取りのぞいて花に袋をかけたもの(B)、なんにもせずに自然任せにしたもの(C)をそれぞれ設定して、実験してみたところ、AとCでは、結実が見られ(写真8)、その後、得られた種子をまいてみると、発芽することがわかりました。一方、Bには結実がみられませんでした(写真9)。

この結果は、ミヤマオダマキが受粉により結実していること、また、自家受粉による結実が可能であることを示していると考えられますが、ミヤマオダマキの特異的な花のつくりは、進化の過程でマルハナバチと強い関係性にあったことを疑わせるものです。しかし、現在に至っては果たしてどのような関係にあるのか、それは、明らかにされているようで、明らかにされていないとても興味深い問題です。

## 企画展



会期 2025年3月9日(日)～5月10日(土)

# 「学校の生きもの探索記」見どころ紹介

千葉 悟志

さあ、生きものさがしに出発だー

学校の広いしき地では、畑で野菜をつくったり、花だんに植物を植えたり、自分の背だけよりもずっと高い木が何本も植えられたりしています。川が流れていたり、川から水を取り込んで水路に流していたりする学校もあります。

そして、この広いしき地を田んぼや畑、果樹園などが囲む学校、山すそにある学校と、まさに、学校は大町市の自然をギュッと縮めた環境にあると言えるでしょう。

このように、いろいろでちがった環境にある学校では、どういった生きものに出会えるのでしょうか。また、どういった現象を観察することができるのでしょうか。

ここでは、展示解説にある「夜に咲く花」と「アリがタネを運ぶ」の2つをご紹介します。

そして、執筆には日ごろから、自然に触れ、解説する機会が多い博物館学芸員や地域に根差して観察を続ける研究者が、「これは、紹介したい」という学校や家で観察できる事柄について、それぞれの視点で紹介します。

担当者が読んで「これは、おもしろい!」と思える内容ですので、是非、この機会に博物館へ足を運んでいただければと思います。

## 展示解説

- 1 さあ、生きものさがしに出発だー
- 2 観察の便利グッズと服装
- 3 観察の時に気をつけたいこと
- 4 ここ、注目～
  - ・朝に咲く花
  - ・夜に咲く花
  - ・チョウとガのちがい
  - ・ハチとハエやアブとのちがい
  - ・校庭のバッタ
  - ・学校田んぼのカエル
  - ・コウモリは鳥なのか?
  - ・ニュウナイスズメってなにもの? ほか
- 5 昆虫の種類と環境、おもに見られた昆虫
  - ・大町西小学校、大町北小学校、大町東小学校、大町南小学校、八坂小中学校、美麻小中学校
  - ・全校で確認できた種、一部の学校を除いて共通する種、大町市で増えてきている昆虫
  - ・まとめ
- 6 学校でおもに見られる昆虫 (QRコード)

◆会期 2025(令和7)年  
3月9日(日)～5月10日(土)

◆開館時間 3月まで 午前10時～午後4時  
(入館は午後3時30分まで)  
4月から 午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)

◆会場 市立大町山岳博物館 特別展示室

◆観覧料 大人 450円  
高校生 350円  
小・中学生 200円

◆主催 市立大町山岳博物館

◆協力 安曇野市立豊科郷土博物館 飯田市美術博物館  
長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館

●執筆者

栗林勇太さん(信州野鳥の会会員) 四方圭一郎さん(飯田市美術博物館学芸員)、中村千賀さん(長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館研究員)、藤田淳一さん(長野県植物研究会会員)、松田貴子さん(安曇野市立豊科郷土博物館学芸員)、当館職員3名(清水・岡本・千葉)

●写真提供 前畑真実さん(伊丹市昆虫館) 丸山隆さん(動物写真家)



## 注目 夜に咲く花



花は日中に咲くものだと思っていませんか。学校や家のまわりに生えている北アメリカ原産のマツヨイグサのなかまは太陽がしずんでから咲きはじめます(1と2)。なぜか? それは、花粉を運んでくれる虫が夕方から活動をはじめるからです。

花粉は、納豆の糸のような粘着糸でつながっています(3)。ガがみつをすう間にこれがからまり(4と5)、つぎの花に行き、めしべの先にある柱頭にひつつけば、受粉は成功です。

### 知って役立つ豆ちしき

長野県希少野生植物のササユリの花にも、スズメガやヤガといったガがやってくるよ。開花期は6月中旬から下旬で、鷹狩山に登る途中でも見ることできるんだ。ちなみに、ササユリの花粉を運ぶのがスズメガ(6)やヤガのなかまであることを最初に世に発表したのは、山岳博物館なんだよ。

今日の当番  
千葉



【写真の説明】

つぼみは夜になると咲きはじめる(1と2)。粘着糸でつながる花粉(3)。花におとすれたベニスズメの触覚やあしには黄色の花粉がくっついている(4)。ガの長い口(口吻)に粘着糸がからまっている(5)。ササユリの花におとすれたエゾシモフリズメ(6)。

## 注目 アリがタネを運ぶ



スマレやホトケノザ、カタクリ、フクジュソウなどのタネには、アリが好むエライオソームというものがついていて(1)、アリはエサとするためにタネごと巣に運びます(2)。エライオソームを取りのぞくと、タネはもう必要ないので、アリは定めたゴミすて場にタネをすてます(3)。これだと、植物にはなんのメリットもないように思えますが、移動できない植物にとって、アリがタネを運んでくれることで、生える場所を広げることができるうえ、ゴミすて場は解体された死がいなどの残がい栄養となるので、タネが芽生えて成長するにはうってつけなのです(4)。



### 知って役立つ豆ちしき

アリというと、死がいや人の食べかすなどはかりを集めているイメージがあるけれど(5と6)、タネなどの植物をエサとして集めることもあるんだよ。日本で知られる250種をこえるアリの多くは、じつは雑食性で、なかには植物だけをエサとしているアリもいるんだ(7)。

今日の当番  
千葉



【写真の説明】

カタクリのタネを運ぶアリ(1)。フクジュソウの果実を運ぶアリ。白色の部分がエライオソーム(2)。白色のエライオソームを取りのぞき、すてられたフクジュソウのタネ(3)。前年の巣のあったあたりから出たフクジュソウの芽生え(4)。虫の死がい(5)を運ぶアリ(5)。食べかすを運ぶアリ(6)。花を運ぶアリ。アリのなかには、植物だけをエサとしている種がいる(7)。

(市立大町山岳博物館 学芸員)

# 展示・イベントのご案内

## 企画展「学校の生きもの探索記」

学校には生け垣や花壇、池や流路があるほか、周囲には果樹園や田畑などがあり、さまざまな生き物が生活していることから、自然観察に適した場所です。学校で観察できる自然について、地域で活動する学芸員や研究者がそれぞれの視点で紹介します。

- 主催 安曇野市立豊科郷土博物館、飯田市美術博物館、長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館、大町山岳博物館友の会
- 期間 令和7年3月9日(日)～5月10日(土)
- 時間 3月：午前10時～午後4時  
(入館は午後3時30分まで)  
4月～：午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)
- 会場 当館 特別展示室
- 費用 通常の観覧料(常設展と共通)が必要です。

## 山のサイエンスカフェ in さんぱく 2024

当館が実施している人文・社会科学および自然科学における調査研究や収蔵資料に関する研究報告と話題提供を行う座談会を行います。

- 期日 令和7年3月8日(土)
- 時間 午後1時30分～午後4時
- 会場 当館 講堂
- 対象・定員 どなたでも・30名(先着順)
- 費用 参加費無料
- 申し込み 事前に電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ

## 山のサイエンスカフェ／企画展関連催し 申し込み先

### 市立大町山岳博物館

電話：0261-22-0211

FAX：0261-21-2133

Eメール：sanpaku@city.omachi.nagano.jp

※先着順。定員になり次第締め切ります。

## 企画展「学校の生きもの探索記」関連催し ミュージアムガイド

学芸員が企画展の見どころなどを解説します。

- 期日 令和7年3月9日(日)、4月20日(日)
- 時間 各日とも 1回目…午前10時30分～  
2回目…午後2時～

※各回の所用時間は30分程度、午前・午後とも内容は同じ

- 会場 当館 特別展示室
- 対象・定員 どなたでも・定員なし
- 費用 参加費無料。ただし、入場には通常観覧料(常設展と共通)が必要となります。
- 申し込み 事前申し込み不要。当日直接ご参加ください。

## 企画展「学校の生きもの探索記」関連催し さんぱくゼミナール① 理科「学校や家での楽しい観察 一植物を中心に」

植物を中心としたお話をしながら観察会を行います。

- 期日 令和7年4月27日(日)
- 時間 午前9時30分～11時30分
- 会場 大町市立大町西小学校
- 講師 千葉 悟志(市立大町山岳博物館 学芸員)
- 対象・定員 小学生とその保護者、友の会会員  
20名(先着順)
- 費用 参加費無料
- 申し込み 事前に電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ

## 企画展「学校の生きもの探索記」関連催し さんぱくゼミナール② 理科「学校や家での楽しい観察 一鳥を中心に」

鳥を中心としたお話をしながら観察会を行います。

- 期日 令和7年5月10日(土)
- 会場 大町市立大町西小学校
- 時間 午前7時～9時
- 講師 栗林 勇太さん(信州野鳥の会会員)  
岡本 真緒(市立大町山岳博物館 学芸員)
- 対象・定員 小学生とその保護者、友の会会員  
20名(先着順)
- 費用 参加費無料
- 申し込み 事前に電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ

## 野外活動講座（講演会）「山岳都市 おおまちの歴史」実施（共催事業） 令和6年8月31日（土）



長野県山岳総合センターとの共催事業として実施した講座（講演会）で当館学芸員が講師をつとめました。講座では、「針ノ木峠周辺の山岳文化史」と副題を付け、この峠を越えて織り成された時代ごとの特徴的な事柄を紹介し、北アルプス山中に位置する峠が持つ重要性を考え、山岳文化都市「大町市」の歴史を探りました。

当日は、台風の影響による悪天候にもかかわらず集まっていた参加者の皆さんとともに、山の歴史や民俗を学び、現代そして未来へ向けた“北アルプスと私たちのかかわり”の在り方を考えるひとつのきっかけとなりました。

## 友の会サークル花めぐり紀行による企画展見学

令和6年10月3日（木）・4日（金）

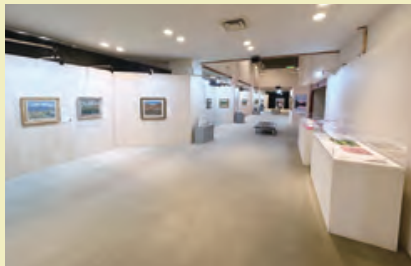


国立科学博物館上野本館で、7月30日（火）～11月4日（月・休）まで開催された企画展「高山植物～高嶺の花たちの多様性と生命のつながり～」を、担当された村井良徳さん（研究主幹）の解説で見学しました。

展示では当館から貸し出した「ライチョウ」、「オコジョ」をはじめ、志村烏嶺著の「高山植物採集及培養法」も展示されていましたが、展示のレイアウトなど参考になりました。

2日目は、筑波実験植物園へ移動し、ここでも村井さんに解説をしていただきました。時間が足りず、すべてを見て回ることはできませんでしたが、会員同士の会話も弾み、とても充実した2日間でした。

## 「2024信濃大町美術展・ おおまちセレクション」開催 令和6年9月8日（日）～23日（月・祝）



大町市内では、9～11月に「北アルプス国際芸術祭2024」が開催されました。これにあわせ、現在活躍中の地元美術作家らの作品と大町市が所蔵する美術作品などから選りすぐった秀作を展示する「信濃大町美術展」（主催：信濃大町美術展実行委員会）が大町市文化会館の特設ギャラリーを会場として開催されました。

当館では、実行委員として参画するとともに、当館収蔵の山岳風景画7点を出品しました。また、会期中の毎週末に開催されたギャラリートークでは、当館学芸員が9月15日（日）の回を担当し、作品解説などを会場で行いました。

## 大町東小学校2年生 付属園見学

令和6年10月11日（金）



10月11日に大町東小学校の2年生21名が来園し、付属園を見学しました。元気よく様々なことに興味を持ちながら、付属園の生きた動植物たちを観察しており、生き物への興味関心を深める機会になったのではないかと思います。ライチョウ舎ではライチョウを驚かせないように静かに観察し、動物に配慮する様子も見られました。後日感想をいただき、「また行きたい」「タヌキのおしおがかわかった」など嬉しいお声をいただくことができました。

地元大町市の博物館である“さんぱく”にいつでもお越しいただき、大町市の魅力を発見し、関心の幅を広げていただくきっかけになることができたら幸いです。

## 上田瑠偉トレラン体験会、鷹狩山 トレッキング、トークショー

令和6年9月15日（日）・16日（月・祝）・  
10月14日（月・祝）



10月14日まで開催した企画展「大町の少年が世界を駆ける～山岳ランナー上田瑠偉10年の軌跡～」の関連催しとして、9月15日にトレラン体験会、翌日16日に鷹狩山トレッキングを開催しました。両イベントでは、講師としてプロトレイルランナーの上田選手をお迎えして鷹狩山の頂上を目指しました。また、会期最終日の10月14日には、特別展示室にて上田選手と写真家の藤巻翔氏によるトークイベントを急遽開催しました。会期終了間際まで上田選手と直接対話をしながらトレイルランニングを知る機会を設けることができ、盛り上がりを見せた企画展となりました。

## 高瀬中学校2年生 植物標本の づくり方

令和6年11月1日（金）



高瀬中学校では、総合的な学習の時間で、来年に向け中学校の近くを流れる「高瀬川」の河川等に生育する植物相を明らかにするため、植物調査を行う計画をしているそうです。そして、秋の成果発表の際には、採集した植物標本を展示する計画も立てていて、この度、生徒2名が先生とともに博物館に訪ねて来てくれました。

早速、計画などのお話を聞きながら、収蔵している標本をご覧いただいたり、標本の作成の仕方やその際の注意点について説明させていただいたりしました。とても熱心で質問なども頂きました。来年、どのような成果また写真のような標本ができれば素敵だと、今から期待に胸が高まります。

# 付属園だより ライチョウ放鳥のご報告

9月17日に当館付属園から中央アルプス駒ヶ岳ヘライチョウの雛を移送しました。当館から放鳥した5羽(メス4羽・オス1羽)は9月末の調査で無事発見され、駒ヶ岳の山頂付近で群れになって過ごしている様子が確認されています。

当館では、現地で把握できない生理や病理の究明のため、そして野生での個体数が減少した場合に野生復帰に貢献するための飼育技術を獲得するため、1963年から付属園でのライチョウの飼育を開始しました。その後、2004年までの間に230羽ものライチョウを飼育した歴史があります。しかし、2004年に飼育下最後のオスが死亡したことを受け、大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会におい

て、現状では飼育を継続できないという判断がなされました。大町市でライチョウの飼育が再開されたのは飼育中断から12年後の2016年です。飼育再開後は、環境省・他の動物園・研究者・大学等の研究機関と連携しながら飼育に努めてまいりました。そして今年度ついに当館の飼育開始当初からの目的のひとつであった野生復帰がなされました。長野県内からのライチョウの野生復帰は初めてのことです。多くの方の努力や技術、連携のうえに成功した今年度の雛たちが、野生環境下で無事生育し、子孫を残していくてくれるように願っています。

(市立大町山岳博物館 学芸員 岡本 真緒)



ケージに放した直後の雛(9月17日)



放鳥直前の雛(環境省提供 9月23日)

## さんばく 山博友の会だより

当会と会内のサークル4団体(ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会)の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

### 「播隆の道程 一鍋冠山を歩く」

江戸後期の念仏行者・播隆は文政9年(1826)に槍ヶ岳へ初めて登山し、文政11年(1828)に開山、天保5年(1834)には開闢(かいびやく)としました。播隆は合計5回にわたるとされる槍ヶ岳登山で、山頂に仏像を安置するだけでなく、後に続く登拝者のために山頂付近の岩壁に藁縄と木製の鉤(かぎ)で作った「善の綱」を取りつけました。天保6年10月、播隆は修行のため鍋冠山で冬籠り用の小屋掛けを図りますが、大雪のため失敗して足の指2本を凍傷で失います。その治療のために、安曇野市三郷にある長尾阿弥陀堂に入って越年し、翌年7月まで滞在しました。

友の会主催事業として9月29日(日)に実施した今回の催しでは、当館の関悦志学芸員が講師となり、この鍋冠山を訪ねて、播隆が槍ヶ岳登拝の際に通った古道・飛州新道の一部約4kmを往復して歩きました。講師を含め20名の参加者は、シラビソやコメツガなどの針葉樹からなる原生林の森を歩く静かな山行を通して、播隆の足跡に思いをはせました。

### 「善光寺街道を歩いてみようⅢ

#### ～北国西街道編(第2回)」

友の会主催事業として、10月20日(日)に善光寺街道を散策する催しを行いました。

この催しは、昨年の令和5年度から来年の令和7年度までの3年間をかけて、「北国西往還」、通称「善光寺街道」の松本宿から善光寺宿までの行程を、毎年リレー形式で歩き、それぞれの旧宿場町を中心に当時の面影を訪ね、歴史的な景観を散策しようと企画されたシリーズです。

2年目となる今年は、会田宿～青柳宿～麻績宿をマイクロバスで移動し、各宿場周辺を中心に散策して見学しました。

当日は、講師を含め20名が参加しました。これまで同様、講師には、昨年9月まで当館の副館長を務め、友の会会員でもある清水隆寿さんを迎え、往時の情景を想い浮かべながら、歴史情緒ある街並みや周辺の寺社などにふれた1日でした。

編集・発行



—創立1951年—

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1  
市立大町山岳博物館 編集責任者 鈴木啓助  
TEL.0261-22-0211 FAX.0261-21-2133  
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp  
URL:https://www.omachi-sanpaku.com

2024

冬号

第69巻4号

発行日 2024(令和6)年12月25日

印刷 有限会社北辰印刷  
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1  
TEL.0261-22-3030 FAX.0261-23-2010